

Title	The Modernization of Sumo as a Sport : A Study in the Socio-logy of Sport
Author(s)	Lee, Austin Thompson
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/29158
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【1】

氏名・(本籍)	リー オースティン トンプソン LEE AUSTIN THOMPSON
学位の種類	学 術 博 士
学位記番号	第 8797 号
学位授与の日付	平成元年7月11日
学位授与の要件	人間科学研究科 社会学専攻 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	The Modernization of Sumo as a Sport : A Study in the Sociology of Sport (相撲の近代化——スポーツ社会学の視点から)
論文審査委員	(主査) 教授 井上 俊 (副査) 教授 青木 保 教授 塩原 勉

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はスポーツ社会学の視点から日本の相撲の研究を行なうものである。

第1章では、まずスポーツ社会学の視点、とりわけ Guttman らによるスポーツ近代化論について検討する。スポーツの社会的考察は従来おもに体育学の中で行なわれてきたが、スポーツ社会学は一般社会学の一部門でもある。スポーツ社会学にはさまざまなアプローチがあるが、その一つに近代スポーツの発達を理論的および歴史的に追求する方向がある。

スポーツは普通「遊び」の一形態と見なされているが、プロ・スポーツや高度のレベルのアマチュア・スポーツのような、遊びとはいいがたいスポーツ活動の発達がとくに近代以降にみられることなどからもうかがわれるように、近代産業社会とともに発達してきた近代スポーツは、近代以前のスポーツとはかなり違った性質をもっている。Guttman によると、近代スポーツには七つの特徴がある。その七つとは世俗化、平等化、役割の専門化、合理化、官僚制的組織化、数量化、記録の追求、である。しかし、これらの特徴は、欧米のスポーツの分析から導きだされたものであるから、欧米以外の社会で発達したスポーツについても検討してみる必要がある。そこで欧米以外の国で産業化に一番乗りした日本において発達したスポーツ、しかもかなり伝統的な形態を残していると思われる相撲のようなスポーツをとりあげてみることに有意義であろう。

第2章では、第3章以降での分析の前提として、相撲の現状と歴史について必要最小限のことを述べる。現状に関しては、現在の大相撲について、財団法人日本相撲協会の構成、年寄制度、年寄株、部屋制度、場所の運営、取り組みの運びと決着と審判、巡業、番付、力士の生活と土俵上の振る舞い、給金制度、などについて説明する。

次に、この研究の背景になる相撲の歴史を概観する。平安朝に行なわれた「相撲の節会」（すまいのせちえ）を始め、鎌倉時代の武家相撲と江戸時代の勸進相撲をとりあげ、また神事相撲、草相撲、野相撲、辻相撲、宮相撲などとといったものについても触れる。

第3章では、近代スポーツのもっとも近代的な特徴、すなわち数量化と記録の追求をとりあげる。近代スポーツにおいては時間と空間、さらに業績（performance）までが数量化されている。相撲では、昇進、特に大関と横綱への昇進には数量的な条件がある。また勝率や横綱在位勝率など力士の業績を数量的に評価している。しかし、業績の数量的評価が相撲の世界で一般化するのとは比較的新しく、相撲雑誌に初めて現われるのは大正4年である。

場所についてのデータを提供する星取表が新聞に出るようになったのは明治17年からであるが、これは千秋楽の星取表であり、場所の途中から出るようになったのは明治33年からである。これによって、それまでの場所の展開を毎日追うことができるようになった。また「今日の取り組み」欄に、今日の対戦相手との今までの対戦成績が載っている。対戦成績は今日の一番を予想するために（あるいは終わった後の一番を振り返って論評するために）よく使われる。これが新聞に載るようになったのは昭和30年からである。

また、相撲には優勝回数、連勝、幕内勝ち星数、幕内出場回数など、さまざまな記録がある。新しい記録に対する関心が高いし、記録を破ろうとする意欲が力士や親方に見られる。

優勝制度は場所全体を一つの競争単位とし、それを通じて一番いい成績を収めた力士を称える装置である。初めての優勝制度は明治42年にできた。それ以前は、土付かずや全勝などが評価されることはあったが、個人優勝者というものは存在しなかった。日本相撲協会が個人優勝制度を取り入れたのは昭和元年であり、それ以降、勝負の結果に関して、引き分け、預かり、休みといった曖昧な範疇が廃止された。優勝決定戦の導入と部屋別総当たり制度の確立も個人優勝の競争を激化し、優勝者の正当性を印象づけた。

第4章では、相撲における分化と統合をとりあげる。Guttmanに従って官僚制的組織、合理化、専門化に分けて検討する。

「官僚制的」という概念には問題があるが、ここでは財団法人日本相撲協会の組織の発達を跡づける。協会が設立され、その寄付行為と寄付行為施行細則が明文化され、その内容も細かくなってきた。宗教的な権威をもつ吉田司家と行司から世俗的な協会組織へ権力が移ったことも官僚制化の一面を示している。

合理化に関しては設備、ルールの明文化、トレーニング法などを考察している。重要な「設備」の一つとしての土俵は、観客と競技者を分離するために出現したという見解を示す。その結果、土俵の外に出れば負になるという習わしができたと考えられる。相撲の禁じ手は昭和30年に初めて明文化された。科学的トレーニングはまだあまり普及していないようである。

専門化は3つの側面を含んでいる。つまり職業化、競技の中での役割分化、そしてスポーツを支える集団の複雑化である。相撲は早くから職業化しているが、個人競技であるため、野球のポジションに示されるような競技者の役割分化は見られない。しかし、行司、呼び出し、床山、相撲解説者、スポーツ記者など、支え役の役割分化が見られる。

第5章では相撲の民主化をとりあげる。参加する機会と競技の条件がだれにとっても平等でなければ

ならないということは近代スポーツの原則である。さらに「見る権利」も近代スポーツにおいて確立された。相撲も参加する機会と競技の条件が平等になってきたと言える。スポーツの中では特殊なものとして扱われる立ち合いも、平等な条件で競技を始めることが目的である。番付における昇降も成績を厳密に反映するようになった。しかし、大関と横綱への昇進の基準の曖昧さは、平等性の原則に十分合致していない。また外力士の参加が、相撲における機会と条件の平等性を問いかけている。

力士による抵抗や反抗の動きもしばしば生じたが、これらはだいたい力士の待遇改善を要求するものであった。力士が月給をもらえるようになったのは戦後である。

第6章では世俗化の問題をとりあげている。過去のスポーツのほとんどは宗教と何らかの関係をもっていたが、現在ではそれを失って世俗化している。相撲は一見それほど世俗化されていないように見えるが、その宗教的な要素を一つ一つ調べてみると、むしろ後になって取り入れられたものがほとんどであるということが判明する。相撲はいわば「逆世俗化」の過程を経てきている。人気を得るためとか、興行の許可を得るためとか、当時の権力者の庇護や支援を受けるために、それぞれの時代によって、装飾的な意味で宗教的な要素を取り入れてきたのである。

世俗化の問題に関連して、相撲が農耕儀礼として行なわれていたという「宗教儀礼起源説」に対しても本論文は疑問を提示している。この説はほぼ定説となっており、その裏付けとして、1) 記紀などに出てくる伝説、2) 節会相撲、3) 現在全国にわたって行なわれている神事相撲、の3つがあげられている。しかし、これらを一つずつ細かく検討していくと、記紀にでてくるのは果たして「相撲」といえるのか、その宗教性は如何なるものであったのか、相撲の節会は中国から取り入れた儀式であり、農耕儀礼としての相撲が古くから行なわれていたという記録は少ない、勸進相撲の人气が逆に神事相撲の普及に貢献したと推測できる、といった疑問点が生じてくる。

第7章はまとめである。相撲も Guttman のいう意味での近代化の過程をおおむね辿ってきたといえるが、「世俗化」に関しては逆の傾向も見受けられるので、この点では Guttman 仮説に修正を加える必要があろう。一方、従来の相撲研究においては、相撲のもつ宗教的な要素の大半が後代になってから取り入れられたものであるという事実とそのことの意味がほとんど吟味されていない。

優勝制度を中心とする変化は相撲の近代化過程の典型的なものであるが、この過程と平行して横綱制度の形成が見られることは興味深い。「本当の強さ」を数量的に裏付けようとする優勝制度やそれに伴う数量的な評価方式が、相撲における「現実主義」(リアリズム)的要素の発展を示しているとすれば、これに対する「ロマン主義的」リアクションが横綱制度の形成であるともいえよう。横綱の地位は優勝者のそれと違って不動であり、その意味においては前近代的な「帰属」(ascription)原則の要素を含んでいる。しかし、そのような前近代の装いにもかかわらず、横綱制度は近代の産物である。そして、不動の地位と数量的に評価される業績という矛盾を抱えているが故に、この制度は今なお動揺中にある。

相撲には横綱制度のような“invented traditions”が少なくない。近代に入ってから、相撲は意図的に「伝統」的な装いをとることによって生き延び、人気を確保することができた。こうして、現代日本社会のアイデンティティ保持に不可欠の「連続性」を表現する儀式を相撲が提供するのである。スポーツのこうした利用は相撲に限ったものではない。近代オリンピックは invented traditions の典型であ

ろう。この意味で、欧米近代スポーツの「象徴性」が改めて問われねばならない。

結論として、本研究は、スポーツ近代化論の観点から相撲を分析することによって、一方で従来の相撲研究において見落とされていた点を補うと共に、他方ではGuttman 仮説の一部を修正し、その観点から欧米スポーツの近代化過程を見直す必要性を示唆したものと見えよう。

論文の審査結果の要旨

本論文はスポーツ社会学の視点から相撲の近代化過程を分析したものである。A. Guttman らによるスポーツ近代化論を基本仮説として利用しながら、相撲の発展過程にみられる「数量化」「官僚制的組織化」「平等化」「世俗化」などのプロセスを歴史的資料に基づいて詳細に跡づけ、従来の相撲研究に欠けていた多くの新しい知見をつけ加えるとともに、これまで定説とされてきた相撲の「宗教儀礼起源説」に対しても重大な疑問を提起している。と同時に、一方では、欧米において形成されたスポーツ近代化論を日本の伝統的スポーツの分析に適用することによって、逆にその理論的不備を照射し、とくに「世俗化」仮定が必ずしも単純に当てはまるものではなく、しばしば“invented traditions”のような形をとる「逆世俗化」現象がみられることを指摘している。以上のように、本論文は、巧みな問題設定と丹念な資料分析によって興味深い成果を挙げており、学術博士の学位を授与するに相当するものと認定した。